

木船家文書とは？

木船家は東舞鶴地区の溝尻村にあり、江戸時代後期には村々をまとめる役割である大庄屋を3代に渡って務めていました。木船家文書には大庄屋時代から近代にかけてのものが残っています。



木船家文書が収納されていた箱
(京都府立丹後郷土資料館)



文化3年 祖母谷組周辺図

(出典：『舞鶴市史』872頁、拡大)

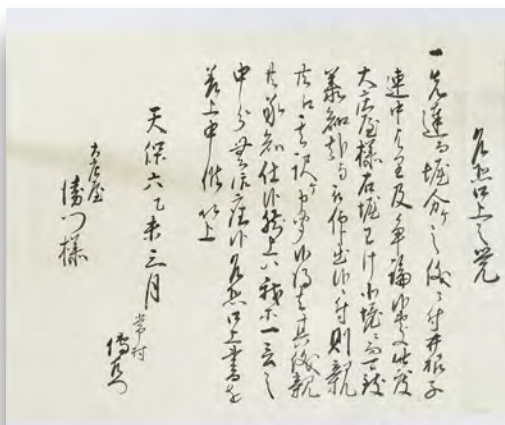
大庄屋とは？

大庄屋は複数の村のまとまりである「組」を領域として仕事をこなしていました。かつて田辺藩には8つの組があり、そのうち木船衛門はそぼたに祖母谷組の大庄屋でした。

田辺藩には江戸時代を通じて大庄屋が配置されており、藩にとっては地域支配に不可欠な存在でした。

では、大庄屋・木船衛門はどのような仕事をしていたのでしょうか？少し木船家文書をみてみましょう。

左の古文書は、常村にて共同用水の分け方について争論していたところを、大庄屋・木船衛門が裁定に入り、一同が承知したという内容です。このような領内の争論の際、藩の裁判に至る前に大庄屋が介入し解決を図りました。

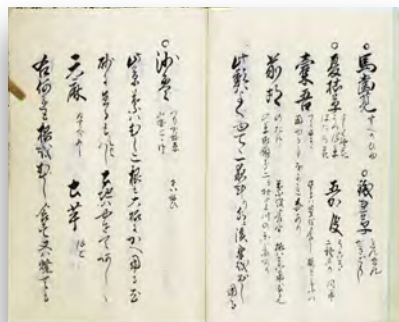


天保6年「乍恐口上之覚」

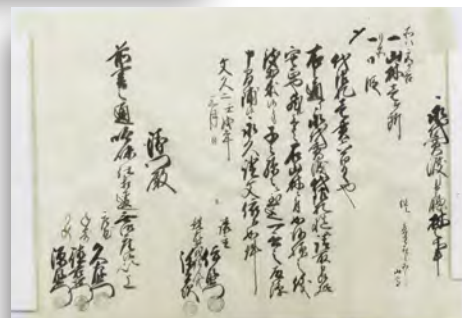
また、困っている人々を救うのも大庄屋の仕事です。江戸時代後期には、藩財政の悪化や飢饉など様々な生活の危機が起きました。なかには、飢饉や疫病に対する食用野草に関する写本なども残っています。

大庄屋は比較的経済力のある家が就任しており、木船衛門も困窮状況にあった村役人層の山林・田畑を購入し、その代金を再建資金としたり、破産状態であった他組大庄屋の救済に寄与したりしました。

広く見れば田辺藩の大庄屋の仕事は、全国の一般的な大庄屋のものと大きく変わりませんが、時代の変化に対応して新たな役割を果たしていた一面もあったのです。



◀天保7年「凶年二付給物書 従公儀被仰出并医師吟味書」



▶文久2年「永代売渡し申腰林之事」